



三田 壮一郎—さんだそういちろう
 ■1999年、大阪府大阪市生まれ。上宮高等学校卒。小学生時代から高校卒業まで続けた野球では、全国高等学校野球選手権大阪大会でベスト4に進出、5番ライトでレギュラー出場した経験も持つ。その傍ら、中学3年生まで6年間、関西ジャニーズJr.として活動した。

以前から足を運んでいた学内のイノベーション創生センターの職員から勧められて「ゆめサポ」に応募した三田さん。提出した活動計画書の見出しは、「30歳までにM&AでExitする起業家になる」だった。父親が経営者だったこともあり、自然と自分もその道へ進むものだと思っていた。その足掛かりとして1年次を終えた後に休学してプログラミングスクールへ通い、ウェブ制作会社を経て、現在はウェブマーケティング会社でインターン中。同時に個人事業主として、保険代理店、葬儀会社、花屋などのクライアントからウェブ制作の仕事も請け負っている。復学した今は、学業と個人事業、さらにインターンの3つをこなす忙しい日々。「毎日楽しいですよ。すべて自分がやりたいと思って選択したことだから大変でも頑張れます」。

両立の術を学んだのは、少年時代から長年続けた野球だった。高校時代は野球の名門高校で、レギュラーとして活躍していたこともあるほどの腕前。だからといって学業はおろそかにしたくない。自分にとって、したいこと、すべきことを両立する鍵となった気持ちの切り替え方を、この時期に会得できたことが、今のスタイルにも繋がっている。

さらに中学卒業までは、関西ジャニーズJr.として芸能界で活動していたという異色の経歴も。ユニットを組んで、テレビ番組に出演したり、先輩グループのバックダンサーとして、大阪城ホー

LEADERS NOW!

在学中に起業、 学業と事業を両立

顧客のために価値の創造をめざして！

●経済学部 4年次生
 三田 壮一郎 さん

三田壮一郎さんは、幼少時代からジャニーズ、高校野球など競争の激しい世界を駆け抜け、今は「大学在学中に起業、30歳までにExitする」というゴールを目指して突き進んでいる真最中だ。



▲野球の名門校、上宮高校でレギュラーを務めた



休学中に通っていたプログラミングスクール▶

ルや京セラドームでの華やかなコンサートの舞台にも立っていた。「その時の仲間が、芸能活動と勉強の両立を頑張って大学へ進学しました。今も前向きに努力しながら活躍している姿を見ると、自分のモチベーションになっています」。

当時もう一つ得ることができたのは金銭感覚。小中学生にとっては大きな金額を手にしたが、深く考えずに使った結果、「お金って、こんなにすぐなくなるんだ……」と感じた。お金の大切さを早い時期から学べたことも、個人事業主として仕事をする今、貴重な経験だったという。また三田さんは、「お金は価値の対価。価値とは顧客のプラスの感情だと思っていて、与えることができた時こそ、その対価として手にすることができるものだと考えています」。

現在の事業を法人化するための準備も着々と進行中だが、新たな目標は、薬事法管理者の資格を取得すること。法律的にクリーンでない広告ページが溢れる中、三田さんはただ商品売るためではなく、信頼を獲得できるサイトを制作したいと考えている。今回の支援を受けられたことは、その大きな後押しにもなった。起業を目指す後輩には、自分の一番大きな夢をアピールすべきとアドバイスする。「夢を心の中に留めておかず外に発信したからこそ、自分は応援してもらえたんだと思う。今の自分の立ち位置から距離のある夢を話すことは、少しも恥ずかしいことじゃないと思います」。

おもてなしのできる 翻訳機の開発を

新たな夢を見つけ、未来を見つめる

●大学院外国語教育学研究科 博士課程前期課程 1年次生
 細川 真菜 さん

「エアラインやホテル業界を目指していました」と語る細川真菜さん。外国語学部4年次生だった昨年、志望していた業界はコロナ禍の影響で採用を中止。思うような就活ができなかった。だが、接客現場で役立つ翻訳機を開発するという新たな夢を見つけ、大学院へ進学。「ゆめサポ」の支援も得て、新たな一歩を踏み出した。

「面接をしてもらえずに終わるんだと思ったら、とても悔しかった。エアラインスクールにも通い、万全に準備をしたつもりです。誰かが悪いというわけではないから、悔しさをどこにぶつけていいかわかりませんでした」と、当時を振り返る細川さん。昨年6月ごろ、こうしたもやもやとした気持ちを抱え、ひどく落ち込んでいた。後日、いつも近くで見ていた母から「笑顔がなく、ぼーっとしていることが多かった」と聞かされたという。

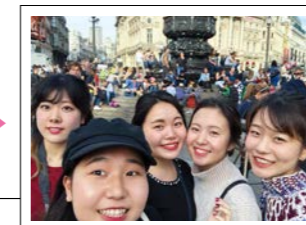
そんな時、目指していたサービス業の「おもてなし」と、ゼミで勉強してきた「翻訳」の両方を生かして、大学院で研究する道もあるのではないかと考え始めた。

人をもてなすサービス業に就きたいと細川さんが思ったきっかけは、2年次生の必修科目である「Study Abroadプログラム」で訪れた英国留学までさかのぼる。この時、フランス、ドイツ、ハンガリー、北欧などヨーロッパ中を旅し、空港や機内、ホテルのサービスにたくさん触れた。

「海外では、自分から意思表示をしないとやってもらえないことが多く、話すスピードもこちらに合わせてくれることはあまりありません。日本のサービスはお客様一人一人に寄り添っていて、価値があるものだったんだな、とその時気づきました」。帰国後、ホテルでアルバイトを始め、サービス業への思いが強くなった。



留学で滞在していたイギリスで
 (写真・上)テムズ川に架かるタワーブリッジ
 (写真・下)ロンドンの広場、ピカデリー・サーカス



●ゆめサポ(夢実現支援金)
 株式会社オービックの野田順弘会長からの寄付金を基に、コロナ禍での修学支援策として、関西大学が2020年に創設した制度の一つ。在学中の夢や目標に向けて意欲的に取り組む人を対象に30万円を無利子貸与(2020年度)し、6カ月後に進展が確認できた場合は返還義務を免除する。昨年度は、155人の学生が選考された。

そして、就職ではなく大学院進学へ方針転換。「ゼミの先生に相談すると、就職がうまくいかなかったから進学するのではなく、きちんと考えなさいと言われました」。そこで、何がしたいのかを本気で考え、おもてなしができる翻訳機の開発ということを真剣に話すと、先生も応援してくれるようになったという。

「ホテルで働いている時に気付いたのですが、接客業でも英語を流暢に話せる人は少ないんです。日本人のお客さまには丁寧に接するのに、海外のお客さまにはそうする余裕がないことがとても気になりました。翻訳機をうまく活用したいのですが、おもてなしの現場では使われていません。その原因を解明し、有効に活用できる翻訳機を開発したいと考えました」

そして、翻訳機への思いを文章にまとめると「ゆめサポ」に採択され、大学院にも無事合格。卒業式では学部の総代に選ばれるなど、すべてがうまく回り出した。

大学院ではまず、既存の翻訳機の翻訳の質や、使い方について調べることにしている。「置かれた場所で一生懸命頑張ることが、自分の才能です」と自己評価する細川さんは、ピンチをチャンスに変えてみせた。「コロナがあって良かったとは思いませんが、この選択がベストだって後々の自分が思えるようにしたいし、できるんだらうなって思います」。その視線は、しっかりと未来に向けられている。

細川 真菜—ほそかわ まな
 ■1999年、大阪府河内長野市生まれ。府立泉陽高等学校卒。外国語学部で学んだ4年間で、自己と異なる価値観に対する理解や受容性が高まったと感じている。ゆめサポの支援金は研究資金とする予定。

